

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー) です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	全職員が目にしやすいリビングに法人の理念を額に入れて貼り出し、職員同士が常に理念を共有しながら、さらに理念を意識した介護サービスの提供ができるよう努めている。	法人理念とは別にホームの理念が作られている。玄関には来訪者にも理解していただけるように5項目からなる理念を掲示している。今年度は理念の一つの「地域の中で自由な生活を支援する」に力を入れている。職員は職場会議やカンファレンス時に理念について具体的に話し合い、確認しあっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	昨年より、毎月第3水曜日に開催される「健康達人クラブ」に参加させてもらい、地域の皆さんと交流を深めている。10/14には、小諸市社会福祉大会で地域の皆さんとグループホームの関わりについて事例発表をすることになっている。	近くの小学校3年生が訪問して七夕飾りを作ったり歌や学習発表の披露をし、利用者が運動会へ招待され応援に行くなど、交流が継続されている。中学生の体験学習を受け入れ車椅子使用の利用者と公園へ出かけたり、学校祭の見学にも出掛けている。市民祭りにも職員が参加し地域の盛り上げに一役かっている。今年から小学生の下校時の見守りに利用者と職員が参加している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	小学校との交流は、ここ数年3学年児童と行っているが、例年交流会前に認知症やグループホームについて絵本の読み聞かせを行いながら理解してもらえよう講演している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	地元区を代表する区長さんや地域住民の代表者に会議のメンバーになってもらっているが、日常的に介護や医療とかかわりを持たない委員の発言は、介護従事者として気が付きにくい視点があり参考になることが多い。	利用者、家族、区長、民生委員、地域住民、市職員、地域包括支援センター職員の参加を得て2ヶ月に1回開催している。主に現況報告や予定等を伝えている。避難訓練や夏祭りの日に合わせホームの様子を見ていただき職者としての意見を頂いたりその前に会議を開催し、その後利用者と一緒に触れ合う機会を持っていただくなど工夫された内容となっている。地区の「達人クラブ」への参加も委員の働き掛けで実現した。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	月々1度、介護相談員が来訪し利用者や話したり、毎月行われる市内4グループホームが集まる会議では市職員、地域包括支援センター職員も加わり事例検討を行い、意見交換をしたりしながら職員同士の交流会を行っている。	市召集の介護事業者の会議で地域ケアに関して部会ごとに話し合っている。毎月2名の介護相談員の訪問があり半年に1回報告書が届き、年度末には各事業所が参加し事例についての話し合いもある。介護認定更新、変更などの調査時には家族が同席することもありホーム職員から現状に沿った情報を提供している。開設からの13年間で市との信頼関係が出来ている。5年に1度の国勢調査についても無事全員が終了した。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	介護のための拘束はあり得ないが、建物の構造上、それぞれの階入り口が階段で危険であることから簡単な施錠をしている。特にこのところ重傷者が多く、車椅子を使用する利用者の危険防止のためにも止むを得ない措置と考えている。	玄関が北側に面し中1階にあり、ユニットが地階と2階という構造になっている。地階ユニットの南側のテラスが一段下がった平地という土地の形状で初めての方には不思議な空間となっている。いずれのユニットも玄関を使うと階段使用となる。家族了承のもと各階段の入口は簡単な鍵をしている。かつて骨折した方を含み転倒防止のため居室ベッドにセンサー使用している方が数名いる。	

グループホーム柳橋・1階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	関連法は、機会あるごとに学習する努力をしている。特に、月々のカンファレンスの際に学習会を行い学びながら防止に努めている。グループホーム外での虐待の事実を確認することの難しさを理解しつつ、介護従事者として見過ごさないことを念頭においている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	単身利用者の財産や金銭管理について、成年後見制度の活用を促す事例が多くなっている。なかなか多くの難しい課題があるうえ、利用者やグループホームの思うに任せない状況もある。又、多分に個人的なことであり、どこまで立ち入るべきかも含めて努力している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用契約書の締結に際しては懇切丁寧な説明に努め、家族や身元引受人の不安を取り除く努力をしている。尚、報酬改定や利用料の改定時には家族あて文章を送付し、改定内容について詳しく説明し理解してもらうよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	アンケート調査や各種行事で家族が面会に訪れた場合など、あらゆる機会をおとして利用者や家族の要望や意見を聴くよう努めている。日常的に、利用者の生活要望に迅速に応えることが大切で、必要であることを職員全員が心がけている。	自分の意見や要望を伝えることが出来る方が多い。使った後のトイレに入り「トイレが臭う」とか「ゴミを捨てて」等の意見も聞かれるという。家族からの要望や利用者の言葉をその都度書き留め全職員が共有できるようにしている。毎月、行事の報告とスナップ写真を載せた「弁天の泉通信」と管理者からのお知らせ、受診結果報告書などが家族へ送られている。家族会が温泉で行われ利用者、家族、職員の交流の場ともなっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月、職場会に法人理事長の出席を求め、職員の意見や要望を聞く機会を設けている。又、「ひらめきノート」制度を活用し、施設整備や事務的なことまで職員から広くアイデアを募り、職場の改善に生かすよう努めている。	毎月、職場会を1回、各ユニットのカンファレンスを1回行っており職員の発言する機会が多い。平成26年より職員による利用者の担当制を取り入れた。担当制を取り入れると同時に職員のスキルアップを図るため、カンファレンス時に勉強会も開催している。職員の気づきなどを記した「ひらめきノート」から優れた「ひらめき」を発した職員が表彰されるようになっている。職員同士の横の繋がりが良好でお互いに協力、助け合いながら業務についている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	他の事業所を参考に、交替勤体制を改善し、就業環境の整備に努めている。又、職員の健康管理に配慮し、毎日、朝、昼、夕方の3回腰痛体操を実施している。又、安全衛生委員会の委員を中心に、職場の点検を通して安全管理に努め、働きやすい職場環境の整備及び改善に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	今年度より、毎月のカンファレンスを各ユニットごとに日時を分け、一緒に学習会を行うこととしている。勉強会の内容は介護、看護と項目分けし外部講師をお願いし学習している。		

グループホーム柳橋・1階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	佐久圏域17グループホームのうち15事業所が参加し連絡会を持ち情報交換、学習会、各事業所の見学、交流訪問などを行っている。11月には認知症についての学習会を予定している。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居予定の段階から、家族やケアマネージャーから詳細にわたり利用者の状況を聞くよう努めている。又、利用者本人とも面接をとおして要望や心配ごとについて耳を傾け、入居後の不安を取り除くよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族が不安に思っていることや、入居後の要望把握に努めながら、どんな些細な要望やお願いごとにも真剣に聞くことで、実情を知るための努力をしている。又、職員間で情報を共有しあいながら、サービス向上に繋げていくよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	介護及び医療の両面から、当面どのようなサービスを必要としているかについて情報収集に努め、要望を的確に見極めながら把握し、入居後の日常の介護サービスに結び付けるための対応を常に心がけている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日常的に洗濯ものたたみや箱折りなど、利用者が得意とする簡単な手作業などを教えてもらい、利用者職員が協力し合える関係づくりに心がけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月利用料請求書を送る際、グループホーム全体の様子に加え利用者ひとり1人の受診結果などお知らせしたり、遠方の家族にも可能な限り利用者の生活ぶりを伝えるようにしている。家族が来所した時は廊下でいっしょに歩行訓練をしてもらったり、他所で暮らす家族に電話し利用者と話をしてもらうようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居前から行きつけの美容院に連れて行くと、美容師さんもグループホームに利用者を訪ねてきてくれる。月一度の「達人くらぶ」には区出身の利用者を連れて行くと近所の参加者と話している。	自宅の近所の方や友人の訪問がある。利用者からそつと「お茶お願い」と伝えられ、居室へお茶等を運ぶなどの支援もしている。お盆や年末年始に外泊する方は減ってきているが、家族と一緒に外出し馴染みの店で食事をしたり買い物をして、一時を楽しみホームへ戻っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日常の生活が狭い空間の中であるため、利用者ひとり1人の行動が目立ち過ぎてしまうこともあるので、利用者同士の人間関係には特に気をつけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用者が退去後も、自宅で獲れた野菜や果物を持参してくれる家族もいる。又、他所の施設に移った家族からの相談や具体的な対応を求められることもある。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の利用者同士の会話や行動から利用者自身の希望や意向を把握し、利用者が困っていることなどはケアプランに活かし職員全員で共有することになっている。又、専門的なことに対してはその都度相談し、アドバイスしてもらったうえでケアプランに役立てるようにしている。	利用者から直接要望を聞いている。利用者のプライドを傷つけないように配慮し一人ひとり違った対応をしている。排泄、入浴等を通じて本人の希望を受け入れることで気持ちが穏やかになり笑顔が多くなっているという。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人に関する入居前の情報や資料を大切にしている。又、入居前に当法人の老健や他の施設を利用している場合は、なるべく事前に本人に会いに行くことを心がけ、その状況をケアプランに活かせるよう心がけている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者本人の言動はもちろんのこと、利用者同士や職員との会話にも常に注意を払い、些細なことも把握するよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	昨年より、それぞれ利用者の担当職員を決め、毎月開くカンファレンスの際に担当者から状態を確認するモニタリングシートを提出してもらっている。モニタリングシートをもとに利用者の支援方法について意見を出し合い、介護計画に取り入れるようにしている。	利用者、家族の意向を聞いて作成している。利用後は4ヶ月に1回見直し、1年後からは6ヶ月に1回の見直しを行っている。担当職員がモニタリングシートを作成しユニット毎のカンファレンスで話し合い、計画作成担当者がプランを作成している。家族にはホーム来訪時に説明し同意を得ている。朝と午後のバイタルチェック、医療面で注意することなどを書き出し、全職員が閲覧しケアに携わっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日常生活の記録はカードックスを使用し利用者の情報を職員全員が把握するようにしている。又、内容ごとにボールペンの色を変えて記入することで、利用者のさまざまな情報が分かりやすく共有できるように努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族や周囲のみなさんと相談しながら、利用者の状態を的確に把握し、常に利用者自身にとって負担のない充実した介護サービスが受けられるように努めている。		

グループホーム柳橋・1階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	毎月、地元区の「健康達人くらぶ」や「ふれあい会食会」、「文化際」などに参加させてもらっている。小学生との交流会はグループホーム開設以来継続している。普段リビングでうとうとしている利用者が交流会では笑顔で拍手を送っている様子が見られる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医の受診は必ず看護師が付き添い、状態を報告している。又、本人の状態により専門医の受診が必要と思われた場合は家族に相談し受診を進めている。家族も医師からの説明により本人の状態を理解し、来訪時の接し方にも気を付けてもらっている。	利用前のかかりつけ医を継続されている方が三分の一ほどいる。かかりつけ医の受診は家族に付き添いをお願いし、協力医の受診については看護師が付き添い、毎月の便りに「受診結果報告書」を同封している。月2回の歯科医の往診時には診療と口腔ケアが行われている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者の普段の行動や症状などに異変が見受けられる場合は、直ちに看護師に状態を伝え、場合によっては医療機関を受診することもある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者の入院時には、医療機関に的確な情報を提供することにより利用者の環境の変化に対応するとともに、早期退院に向けた支援を行っている。それぞれ専門の医師に受診し、何か困った時には電話連絡などで対応を指示してもらっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	法人の方針で、グループホームとして看取りまでは行わないことを入居申請書提出の際、家族や関係の皆さんに説明し理解を求めている。併せて、重症化した場合の対応についても法人内の老健施設や診療所への移動があり得ることを説明し、共通理解としている。	看取りは行わないとしており利用者、家族には伝えている。平成26年の正月、遠方に居住する家族が利用者に面会を兼ねて新年のお祝いに訪れた際に急変しホームで看取られた事例はある。移動の際には次の施設などとの連携を密にし利用者や家族が戸惑いのないようにしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	内部研修で利用者の急変時の対応について学ぶとともに、日々の生活の中で利用者の状態の変化に気づけるようにしている。10月には小諸市グループホーム部会が主催する「普通救急救命講習会」に参加する予定。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	毎年2回定期的に防災訓練を実施し、その際、消防署員の出席を求め、専門的な立場からアドバイスをいただき次回に役立てよう努めている。同時に、職員が消化器や火災通報装置の使用法を確認し非常時に備えている。又、運営推進会議委員に訓練を見てもらい、終了後会議を開き意見を聞いている。	年二回春と秋に避難訓練を行っている。春は夜間想定とし、利用者、職員と一緒に避難した。利用者の避難に力点を置き、全員が無事に建物の外に避難することができるようにしている。スプリンクラー、消火器、火災通報装置等が設置されており有事に備えている。食料品、水、生活用品の備蓄もある。自然災害等を含め1年に1回位、地元区とお互いの情報を交換するような機会をもたれたら更に良いのではないかとと思われる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者への言葉かけについては、丁寧語で対応することを職員相互の共通認識としているが、日常的にはかなりハードルは高い。このため、法人の「接遇委員会」で月々の目標を定め精力的に活動している。	利用者への対応は徹底しており、法人内の接遇委員会で言葉遣い、態度などを2カ月毎の目標として掲げ実践に移している。職員のトイレには常に意識できるように目標が貼り出されている。利用者の呼び名はもとより職員同士も「名字」にさん付けで徹底している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活をとおして、利用者の言葉や表情から何を希望しているかを酌み取ったり推測をしたりして、直ぐに支援できるよう日頃から心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入浴や食事、体操やレクリエーションの時間は予め決めたくえで対応しているが、居室で過ごしたい方、好きなテレビ番組を見たい利用者、塗り絵をしたい利用者など、それぞれに過ごしてもらえるようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	洋服にこだわりを持っている利用者には、毎日の更衣時に自分で洋服を選んでもらうようしている。洋服ダンスの中の洋服が気になる利用者はダンスの引き出しを外し常に洋服が見えるようにしておくなどの工夫している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	ゴマすりや野菜の下ごしらえ、食前の台拭きのお手伝いしてもらっている。又、食欲がわくように盛り付けや色合いも工夫している。下膳の際には自分のお膳を下げてもらうようにしている。食器洗いは多少の危険がともなうので、安全に配慮したうえで職員のお手伝いができるよう心がけている。	食事時間の少し前になるとご飯やみそ汁などの匂いが漂ってくる。お手伝いの出来る利用者や見守っている利用者もいて、匂いで食欲がわいてくる。小鉢や小皿に少しずつ料理が盛りつけられ食が進むように工夫してあった。ホームの畑で採れた夏野菜も食卓に登場している。敷地内に3本の柿の木があり、豊作の年には採れた山のような柿を利用者と一諸に干し柿にしおやつで美味しく味わっているという。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	予め、つくる食事が決まっていないので、前の食事が把握できるよう献立表に記入している。水分量は脱水症状にじゅうぶん気をつけながら摂取量をチェックしている。少ない利用者に対しては食事やお茶以外の時間にも促している。摂取時にムセや拒否のある利用者にはトロメリンを使用したり、ゼリー状にして食べやすくするよう努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一昨年から訪問歯科の先生に来てもらい月々2回診察してもらっている。それぞれの利用者に適した口腔ケアをアドバイスしてもらうとともに職員にも周知し、毎食後の口腔ケアに生かせるようにしている。		

グループホーム柳橋・1階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	リハビリパンツや尿取りパッドを使っている利用者は大勢いるが、日中は声掛けや誘導でトイレでの排泄を促すことにより失禁は少なくなってきている。逆に、自らトイレに行く利用者が失禁していることがあるので、排泄時の様子をできるだけ確認するようにしている。	利用者それぞれに合わせ対応している。排泄チェック表、利用者の排泄前の仕草などを職員が共有し失敗しないようにトイレでの排泄の自立支援をしている。声掛けで排泄ができるようになり介護度が低くなった方もいる。使用後の尿取りパッドはすぐに片づけるようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	グループホームの生活はどうしても運動不足になりがちなので、毎日ラジオ体操や散歩を取り入れている。少しでも体を動かすことで便秘の予防に努めているが、どうしても便秘になってしまう利用者に対しては本人の状態に配慮し下剤での対応をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	一番風呂にこだわる利用者があるので、その都度一番風呂に入ってもらおうようにしている。又、利用者同士の平素の関係にも気をつけながら入浴の順番に配慮しよう心がけている。	ユニット毎に交代で入浴日とし1日6名の利用者が入っている。お風呂を嫌がる利用者は今のところいない。利用者のその日の状態で職員の見守り体制が変わることもしばしばある。常に職員が様子を見て、声掛けをしながら安全で楽しい入浴になるように心掛けている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室でひとりで気楽に休む以外には、リビングにソファを置き自由に休めるようにしている。季節に応じた過ごしやすい室温管理に気を配るとともに、少しでも過ごしやすい快適な環境づくりに努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	受診したうえで医師からの処方をもとに看護師より説明を受け対応している。又、投薬の間違いをなくすため、必ず氏名を色分けしてあることを再確認したうえで投薬をするように心がけている。又、内服薬の効能が分かるように利用者ごとのファイルにまとめ、いつでも見ることができるようになっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	毎日のお天気を記入してもらったり、利用者の洗濯ものをきれいにたたんでもらっている。些細なことでも、できる限り利用者同士が会話ができるように誘導していくように心がけている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	お天気のいい日は、グループホーム南庭の遊歩道を散歩したり利用者みんなで歌を歌ったりしている。地元諸区が主催する月一回の「健康達人くらぶ」を楽しみにしている利用者もいる。年に3回ほど全員で外出する機会を計画し、家族や地域のボランティアに協力してもらっている。	春は隣の公園へお花見に出かけたりイチゴ狩りに出掛け、秋は温泉施設で外出を兼ねた家族会を行っている。外出行事のある月はお便りで家族に参加を呼び掛け、外出ボランティアにもお願いしお花見などに出かけている。外出となると車椅子対応の方が半数くらいとなり、法人のマイクロバスや軽トラに車椅子を載せるなどして出掛けている。今後、個別の外出支援にも力を入れていきたいという意向がある。	

グループホーム柳橋・1階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭を自分で所有している利用者は一名しかいないが、毎月々決まった月刊誌を購入したり自分の欲しい物を購入している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者全員が家族や知人に年賀状や暑中見舞いを書くことにしているので、あて名書きなどの支援をする。又、家族が面会に来た際は、利用者の兄弟や肉親に電話をかけてもらい話をする機会をつくるよう努めている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室やリビングはすべて南向きであるため日差しが入りやすくなっているが、窓が大きいため夏場は暑くなるので、よしずを下げたり手作りの風鈴をつけ涼しさを感じるよう気配りをしている。毎月々、利用者と職員と一緒に作成した貼り絵やカレンダーを居室に飾っている。	広いリビングの一角に和室があり以前はここに炬燵が作られていたが利用者の高齢化に伴い座ることが困難になってきたのでテーブルと椅子が置かれている。食卓テーブルの他にソファも並べられ利用者は食事を終え思い思いの場所で過ごしていた。テレビやラジオ、カラオケなども置かれている。利用者が「歌は大好き、カラオケ大好き」と話してくれた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気の合う利用者同士でお互いの居室を行き来したり、晴れた日は窓辺で日なたぼっこを楽しんでいる利用者もいる。リビングのソファを自分の居場所と譲らない利用者があるため、その場所に他の利用者が座らないよう配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自分の居室に長年かわいがっているお人形を置いたり、好きな動物の写真を飾ったりしている利用者もいる。洋服へのこだわりが強い利用者には、タンスの引き出し出して中の洋服が見えるよう工夫している。	全室南に面しており、眺めが良く明るい。ベッドと使い勝手のよさそうな整理箆筒と洗面台が備え付けられている。入口には表札があり、目印として敬老会の頂き物などが飾られていた。ミニソファ、洋服掛け、小物置き等が家から持ち込まれている。一人ひとり自分の使いやすいようにタンスや持ち込んだ家具を配置している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの位置が分かりにくい利用者もいるので、貼り紙をしたり廊下に矢印をつけたりしている。又、居室には表札をつけているが、それ以外にも廊下から見えるよう名前や目印をつけている利用者もいる。居室にあるキャビネットには、片付けやすいようにシールを貼り自身で出し入れしやすいように工夫している。		